



ウイルヘルムに関する限り、SFであるかどうかは、気にしないほうがいい。本書も、普通小説として刊行された。レッテルの問題は微妙なもので、あまり軽々しく扱えないが、この作者には、そういう、当てはめをしないほうが無難だろう。

アンは、ある製薬会社で、苦痛を除去する画期的な新薬を開発した。だが、自動車事故の療養中に、事態は意外な方向へと進んでいく。動物実験に使ったチンパンジーの異常、人体実験の強行……。そんな中で、アンは夫や友人たちの疑惑を感じとる。新薬は、既に彼女自身が、服用しているのではないのか……。迫力に満ちた傑作であるといえる。主眼は、やはりアンの心理だろう。というより、これまでのウイルヘルムの視点が、このアンの見方に近かったというべきか。本編で、夫クラーク等、多くの人々の目から、事件が語られるのは、むしろ（著者にとっての）新しい試みだからだ。『一人の女の目』が、よりグローバルなほうに移りだした、過渡的作品といえるかもしれない。

ウイルヘルムは、名文家である。本書の訳文も、優れているようだ。（俊）

クルーアイストン実験/
The Clewiston Test
(1976)/ケイト・ウイルヘルム(友枝康子訳)/サンリオ(文庫・1/30刊・
¥460)